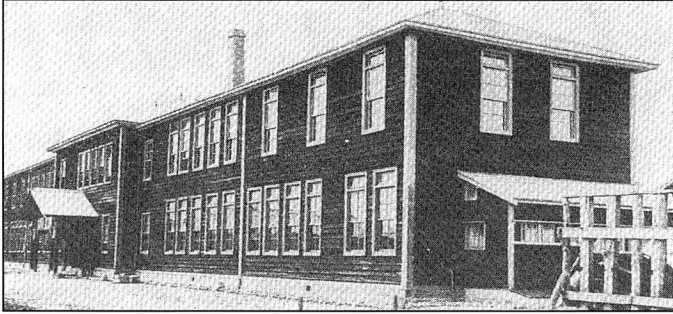


北海道の聾史第2弾

札幌聾話学校の消滅



発表者

工藤 努

(日本聾史学会員・札幌聾史研究会員)

佐藤 忠道

(札幌聾史研究会員)

私立札幌聾話学校略年史

年 月 日	事 柄
大正 14 年 7 月 7 日	豊水尋常小学校訓導近藤兼市が北海吃音矯正学院を創立す。 札幌市南 7 条西 4 丁目、豊川稲荷境内
昭和 2 年 3 月 3 日	私立札幌盲啞学校になる
昭和 6 年 7 月 1 日	校名改称、私立札幌聾話学校、私立札幌盲学校となる 新校舎へ移転。(南 9 条西 1 丁目)
昭和 12 年 6 月 1 8 日	ヘレン・ケラー女史の来訪を受ける
昭和 14 年 4 月 1 日	札幌報国隊を結成する
昭和 16 年 1 1 月 3 日	農芸部を設け、塘路湖畔へ生徒を派遣
昭和 18 年 7 月 1 日	日本聾啞教育福祉協会札幌支部を発会
昭和 19 年	十勝御影村へ先発隊として生徒 6 名派遣
昭和 20 年 7 月 5 日	十勝御影村へ生徒全員移転する。校舎は国鉄札幌管理局へ売却
昭和 20 年 8 月 1 5 日	終戦
昭和 22 年 1 1 月 23 日	近藤兼市校長が逝去
昭和 23 年 1 0 月 1 日	札幌聾話学校が北海道御影聾学校に改称
昭和 25 年 10 月 10 日	生徒減のため北海道帯広聾学校へ吸収され、北海道御影聾学校が 消滅

旧札幌聾話学校の消滅

発表担当／工藤 努（札幌聾史研究会会員）

トークショー 証人／山岸ヤス・宮内昭治

1・はじめに

『旧札幌聾話学校の消滅』というテーマをもとにして、札幌聾話学校の設立から消滅するまでの過程を述べていきたい。

2・北海吃音矯正学院の開設

昭和2年私立札幌盲啞学校を創立した近藤兼市は、大正8年に母校の札幌市立豊水尋常高等小学校に訓導として着任しました。そこで、担当学級の中に吃音の児童や軽度難聴の児童がいたことが契機となり、とりわけ吃音の指導にきわめて意欲的に取り組んだのです。また、児童の中に地元財界人滝本静良の子がおり、この父親の援助が大きかったことが推測されます。

そして、大正14年（1925）に札幌市南7条4丁目豊川稲荷の玉宝寺境内にある木造平屋建ての建物を借りて吃音矯正の研究と指導を重ねて北海吃音矯正学院を設立したのです。



3・近藤兼市先生に影響を与えた人

この当時の近藤兼市先生に影響を与えた人物が三人います。一人は滝本静良さんです。滝本さんの娘が難聴で近藤兼市先生の指導を受けていました。この人は北海道タイムス（今の北海道新聞）の取締役で、札幌聾話学校の保護者会の会長をした方です。滝本さんの強い勧めがあったので、大正14年（1925年）に北海道吃音矯正学院を開設したのであります。



二人目は、札幌市教育会の招きで吃音の子どもの指導のために来札していた村上求馬さんという方です。村上さんは日本聾話学校の教頭で、豊水尋常高等小学校の子どもの吃音指導教室の講師として何回も来ていました。近藤兼市先生は、村上先生から吃音指導についてかなり勉強しているはずだと思われます。

三人目は、ろうあ者の職業教育では全国的にも有名であった深宮友仁さんです。実は、滝本さんが、「親亡き後、子どもたちに自活の道をつけてやりたい。そのためには名刺の印刷でも、年賀状など簡単な印刷でもいいから、何か技術を身につけさせてもらえないか？」ということを深宮さんに懇請したのです。深宮さんのおじという人が北海道タイムス社で印刷関係に従事していたのです。



4・札幌盲啞学校の設立

近藤兼市先生が北海吃音矯正学院をつくった大正14年に盲学校設立の動きがありました。札幌市助役増田彰さんという方が設立委員長となり、私塾的な盲教育施設を創設し、札幌市北1条7丁目日本キリスト青年会館を仮校舎とし、指導にあたったのです。

昭和2年に北海タイムス社社長阿部良夫や札幌市教育課長鈴木又衛の支援を得て、北海吃音矯正学院に札幌市助役増田彰らが創設した盲教育施設（大正14年）を総合して、豊川稲荷境内に新たに私立札幌盲啞学校を創立し、近藤兼市が校長に就任したのです。

しかし、この寺にて学習することによっていくつかの問題が挙げられました。まず一つ目が子どもが増加して教室が足りなくなったことです。次に2つ目が学校経営資金が乏しいこと、そして3

つ目が卒業生の就職先が見つからないことというこの学校の財政的基盤は脆弱でした。近藤兼市先生は、学校としての体裁を早く作りたかったのです。そうしないと文部省から補助金がないので、ずいぶんと金策に奔走しました。一日も早く学校経営を軌道に乗せたいという気持ちが強かったようです。

5・札幌盲聾学校の新校舎完成

昭和6年に新校舎が完成しました。北海道札幌師範学校の改築の伴い、古材の払い下げを受けて、札幌市南9条1丁目に二階建ての新校舎を建築して移転したのです。

実は、北海道師範学校が校舎を取り壊して移転しており、師範学校を取り壊したあとには古材木がたくさん出ます。あるとき、近藤兼市先生が実家の北大寺の本寺中央寺から「小樽の請負師白井彦吉が古材を払い受けたが、利用先に困っているので学校の修理改築に使ったらどうか？」という紹介があったのです。近藤兼市はさっそく、白井と交渉して約3万円で改築建築を契約したのです。このことが翌年の財産差し押さえ事件の伏線となったのです。

6・財産差し押さえ事件

昭和6年に小樽の請負師白井某が、札幌盲聾学校後援会役員らを相手に起こしたのです。この事件で、請負師を相手にした学校側に不審を抱き、募金などの活動は急激に冷え込んだのです。この後は、学校運営資金が逼迫し、電気代、石炭代、米代の支払いにも窮したのです。また、職員への給与未払いが続いたために、教員によるストライキや退職者の続出という窮状に陥り、志気は大いに低下したのです。

7・私立札幌聾話学校の誕生

近藤兼市は、「盲学校及び聾話学校令」(大正12年)の規定に基づいて、私立札幌盲聾学校を盲・聾に分離しました。校名を『私立札幌盲学校』『私立札幌聾話学校』に改称し、文部大臣の許可を受けました。

8・御影村疎開

昭和20年1月、札幌市から「子ども、年寄り、身体障害者は、強制しないが、なるべく、早めに疎開するように」との呼びかけがありました。これを受けて、近藤校長は盲学校、聾話学校の疎開

を決意し、家庭舎、校長住宅及び職業科の建物を残して、それ以外は国鉄(札幌鉄道管理局)に売却し、昭和20年7月5日、両校そろって十勝御影村の北海道聾聾農志塾や二つの旅館、寺院に疎開したのです。盲・聾話学校の生徒の命を守るため、朝配られたおにぎり2個と身の回りのものを入れたカバンだけを身につけたのです。幸いにも、鉄道管理局との交渉の計らいであろうか、臨時列車を仕立ててもらい、目的地まで約10時間かけて移動したのです。

9・私立札幌聾話学校の消滅

昭和22年11月28日に近藤兼市校長が病気のため御影村で逝去されました。

昭和23年3月に私立札幌盲学校を廃校とし、私立札幌聾話学校のみを存続させることとしたのです。そして、昭和23年10月1日に御影村に疎開した札幌聾話学校は北海道立御影ろう学校と改称し、校長に佐藤繁善が就任したようです。

昭和25年9月30日に北海道立御影ろう学校が廃校となりました。

(協力・佐藤忠道)

